

## T・ネーゲルにおける人生の意味の問題

——「主観的見方と客観的見方の衝突」の変遷をめぐって——

八 木 聡

### 序論

私たちは日常生活において、さまざまな事柄に——仕事、趣味、学問、あるいは生きることそのものに——真剣に打ち込んでいる。しかしときに、このような営為の全体が理にかなわず、馬鹿馬鹿しく思えることがある。このような感覚を、かつてカミュは「不条理 *absurde*」と呼んだ。<sup>1)</sup>

この不条理の感覚について論じている哲学者の一人にT・ネーゲルがいる。その議論を要約すれば、私たちが人生を見る見方には主観的見方と客観的見方の二つがあり、それらのどちらも捨てることができないにもかかわらず、それらが衝突することに気づくことが不条理さの感覚を生じさせる、というものであった。この議論は人生の意味の哲学において古典としての地位を占めるだけでなく、その妥当性をめぐって現在でも盛んに論争が行われている。<sup>2)</sup>

ところでネーゲルを擁護する論者もそうでない論者も、その多くが主観的見方と客観的見方の衝突という

T・ネーゲルにおける人生の意味の問題

主題を以下のように解釈してきた。すなわち、「客観的見方とはあらゆるものを重要でないものとして見る見方であり、主観的見方とは何かを重要なものとみなすことを要求する見方である。それゆえ、この二つは衝突する」と。この解釈は、確かに初期の論文「不条理」(以下 $\Delta$ )<sup>3)</sup>にあっては正しい。しかし本稿で論じられるように、それ以降の著作、例えば『どこからでもないところからの眺め』(以下 $\nabla$ )<sup>4)</sup>には、この解釈は当てはまらない。これまで人生の意味の哲学においてはこの見解の変化が見落とされており、ネーゲルの見解は現在なお誤解されることがある。

本稿の目的は、二つの見方の衝突という主題を分析し、そこから人生の意味の哲学にとって重要な指摘を引き出すことにある。本稿で論じるように、 $\nabla$ における二つの見方の衝突には二義性がある。そしてこれまで人生の意味の哲学では取り上げられなかった二つの見方の衝突——不偏的見方と主観的見方の衝突——を取り上げることが、人生の意味の問いについて考えるうえで重要だということを、本稿では示すつもりである。

本稿の構成は以下である。第一節では人生の不条理さが初めて論じられた $\Delta$ を取り上げ、そこにおける客観的見方が、いかなるものも重要性をもたないと見るニヒリズム的な見方であることを確認する。第二節では論文「主観的と客観的」(以下 $\text{SO}$ )を取り上げ、客観的見方の内実がすでに変化していることを確認する。第三節と第四節では $\nabla$ を取り上げ、客観的見方に二義性があるために、二つの見方の衝突も二義的なものになっているということを確認する。第五節では、人生の意味の哲学において先行研究ではこの見解の変化が見落とされていることを指摘するとともに、このことが人生の意味の哲学においてもつ意義について論じる。

## 一 VZ以前の二つの見方の衝突①…ニヒリズムの見方としての客観的見方

本節では、ネーゲルがこの衝突について論じている最初のテキストである論文「不条理」を取り上げ、この論文において客観的見方と主観的見方の衝突が何を指すのかを明らかにする。

この論文の主題は人生の不条理さ *absurdity* の感覚を説明することである。ネーゲルは、式典中にズボンがずれ落ちるといふ事態を前にしたときに感じる感覚を不条理の例として挙げる。ネーゲルは、この感覚は「要求 *pretention* または切望 *aspiration* と現実との間に、はっきりとわかる食い違いが生じている場合」に生じると説明する。この説明によれば、式典ではそれに適った礼儀正しい振る舞いが要求されるが、ズボンがずれ落ちるといふ現実はその要求に著しく反するため、不条理に感じられるということになる。同様に、人生に関して主観的見方がもたらす要求や切望と、客観的見方の提示する現実との間に、はっきりとわかる食い違いがあると気づくことによつて人生の不条理の感覚が生じる。この説明の内実を明らかにするために、主観的見方がもたらす要求と客観的見方が提示する現実、それらの衝突についてのネーゲルの見解を要約しよう。

トマスが指摘しているように主観的見方とは、私にとつて、あるいはあなたにとつてという、誰かにとつてという視点をともなつた見方である。私にとつては哲学の論文を書くことが重要であり、あなたにとつては山に登ることが重要であるかもしれない。そして私は、哲学の論文を書くことは重要だという理由にもとづいて、図書館に行くことを正当化する。このように、私たちにとつては少なくとも何らかのことが重要であり、それに基づいて何らかの行為を正当化し、行為している。主観的見方が要求するのは、何かを重要

だと思い、正当化して行爲するというこの営みを重要だとみなすことである。というのも、少なくともこれらの営みを重要だとみなさない限り、私たちは人生を営むことができないからだ。<sup>8)</sup>

しかし私たちは、なにかを重要だとみなし正当化する営みすべてを外から眺めてその根拠を問う観点——客観的観点、ネーゲルはこの見方を「永遠の相のもとに」世界を見る仕方だと述べる<sup>9)</sup>——を取ることができ、そこで明らかになるのは、これらの営みを正当化する最終的な根拠は私たちの慣習でしかないということである。例えば哲学の論文を書くことを正当化する理由について考えてみよう。その一つの理由として、世界に何らかの知識が増えるということが挙げられるだろう。しかし、知識が増えるということそのものが理由として正当なのは、私たちが慣習的に「知識を増やすことはよい」ということを自明視しているからでしかない。そしてこのように考える慣習は、私たちがたまたまもっている偶然の産物にすぎず、それが重要であると信じる理由はない。そして私たちの営為の全体は、重要性を持たない慣習という根拠にもとづいているため、重要性を持たないものとして見出される。このように<sup>10)</sup>における客観的見方とは、私たちの営為の全体が重要でないということを見出す見方である。そこで本稿ではこの見方を「ヒリズム的見方」と呼ぶ。ここまで見てきたように、主観的見方は私たちの取り組んでいる営みを重要だとみなすことを要求するのだが、客観的見方はそれらが重要だと信じる理由はないという現実を提示する。このように、主観的見方の要求と客観的見方の提示する現実が衝突する。この衝突に気づくことによって生じるのが人生の不条理の感覚である。ここまで<sup>11)</sup>における主観的見方と客観的見方の衝突について瞥見してきた。次にSOにおいてすでに客観的見方は変化しており、衝突の内実にも変化があるということを描する。

## 二 MN以前の二つの見方の衝突②

### 論文「主観的と客観的」における客観的見方の程度化

論文SOはAと同様にMOに所収されている。<sup>⑪</sup>しかしSOの議論を分析してみると、客観的見方の内実がすでにVから変化しているということが分かる。というのも、Vの客観的見方はもっぱらニヒリズムの見方という特定の見方を指していたが、SOでは客観的見方は程度を容れるものだからである。このSOでの客観的見方の内容はMNにも引き継がれている。そこで本節では、SOにおける二つの見方についてのネーゲルの説明を参照し、Vの議論とどのような変化があるかを見ていく。

ここで主観的な見方とは、誰かにとってという視点を伴った見方のことだった。<sup>⑫</sup>ネーゲルはSOで主観的見方を「特定の体質、状況、世界の残りの部分への関係を持った特定の個人の見方」とも呼んでいる。私たちはそれぞれ目が悪い、色の認識が苦手だといった体質を持っている。また私たちは酒に酔っている、高熱で視界がぼやけているなど、さまざまな状況のうちにある。そして例えば、酒に酔っているという状況にある私たちにとって、本当は一つしかないりんごが二つに見えることがある。このように、それぞれの視点から、すなわち主観的に世界を見るときには「自分の極めて限定された特性や状況」<sup>⑬</sup>などに由来する偏りが生じる。

しかし、りんごが本当は何個あるのか——自分にとっての見え方が正しいのか——を考えるためには、この主観的見方を脱し、それが妥当なものか判断する新たな見方に立つ必要がある。というのも、ここまで見てきたように主観的見方のもとでは、信念は自分のもつ様々な性質によって歪められているからである。そ

ここで、個人が置かれている体質や状況といった見方の偏りを引き起こす性質に目を向け、その偏りを矯正することを可能にするのが客観的見方である。<sup>(15)</sup> 主観的観点から一步退き「酒に酔っている私」「りんごが二つに見えている私」を客観化／対象化 *objectify* することで、主観的見方をあくまで一つの見え方に過ぎないと思なすことができる。りんごが二つであるということは、あくまで酒に酔っている私にとっての見え方でしかないということに気づくことで、本当はりんごは一つしかなく、もとの自身の判断が誤りだったと気付く。このように、信念を持つ自分自身を反省の対象にすることによって、主観的見方を一つの見方に過ぎないものとみなすプロセスが客観化であり、このようにして形成されるのが客観的見方である。<sup>(16)</sup> 客観的見方をとることは、世界の本当のあり方を明らかにすることを可能にする。<sup>(17)</sup>

ここで確認したいのは、客観的見方には程度があるということである。ネーゲルは「主観的と客観的との区別は相対的なものである。人間一般の見方は、たまたま置かれている場所から見た見方よりも客観的だが、物理学の見方ほどは客観的でない<sup>(18)</sup>」と述べる。個人のもつ性質による偏りを取り除いて形成された客観的な見方であってもなお、人間固有の知覚形式にもとづく偏りがある。<sup>(19)</sup> ネーゲルが好んで挙げるのは二次性質に關わる信念である。例えば「このりんごは赤い」という信念は、人間一般のレベルでは正しいとしても、他の動物にとってはそうではない。このような人間という種に由来する見方の偏りをも取り除いた、さらに客観的な見方として物理学の見方というものがある。このように、見方の客観性はだんだんと上昇する、程度を容れるものなのである。そしてこのような客観的見方の形成の極限にあるとされるのが、どこでもないところからの見方である。この見方は視点性に由来するいかなる偏りにも影響されず、世界をありのままに捉える見方である。<sup>(21)</sup>

ここまでの内容をAと比較してみるならばその違いは明確である。前節で論じたようにAの客観的見方とは、私たちの営為が一切の重要性を持たないものとして見出される見方のことであった。それに対してSOの客観的見方は、正しい判断に到達するためにもとの主観的見方を対象化して形成される見方であり、それには程度がある。

この違いに応じてSOにおける二つの見方の衝突の内実にも変化がみられる。一方でネーゲルは、不条理の感覚が「自分が全く重要性を持たなくなるような広大な観点を受け入れることができるにも関わらず、行為においては自分の人生に多大な重要性を与えている」<sup>(24)</sup>ことから生じると述べている。これはAと同じニヒリズムの見方と主観的見方の衝突について述べていると見てよいだろう。しかし他方で、客観的見方を取ることによって「個人的な諸価値が消滅してしまうことから、帰結主義と人生の意味の問題が生じる」<sup>(25)</sup>と述べている箇所もある。ここで注目すべきことは、個人的な諸価値の消滅がすでに、人生の意味の問題、すなわち主観的見方と客観的見方の衝突を引き起こすとネーゲルが述べていることである。ここで個人的諸価値と呼ばれているものは、エベレスト登山や平均律クラヴィア曲集のマスターといった、各人それぞれがもつ関心のことである。<sup>(24)</sup>つまり、Aとは異なってSOでは、客観的見方を取ることであらゆる価値が消滅することによってではなく、各人それぞれが持つ関心の価値が消滅することによってすでに、二つの見方の衝突が引き起こされるとネーゲルは考えていることになる。

これはAには含まれていなかった衝突だが、その内実についてSOの段階ではいまだ明確ではなく、それが明らかにされるのはVNにおいてである。そこで、第三節と第四節では二つの見方の衝突についてのVNの見解を見ていこう。

### 三 VZにおける主観的見方と客観的見方の衝突①

#### ニヒリズムの見方としての客観的見方

前節ではSOにおいて客観的見方が程度を容れる見方に変わっており、この変化に応じて二つの見方の衝突についても変化があることを見てきた。本節と次節では、VZにおける客観的見方がどのようなものであるかを明らかにした上で、二つの見方の衝突について見ていく。結論を先に提示すると、VZにおいて主観的見方と衝突する客観的見方についてネーゲルは二つの捉え方をしている。一つはニヒリズムの見方であり、これはVにおける客観的見方と同じである。もう一つは不偏的見方である。不偏的見方についての説明は次節で行うこととするが、さしあたりこの見方は自分と他人を区別せず、平等に配慮されるべき対象として見出す道徳の見方だと考えてよい。まずはこの二つの見方の違いが、客観性の程度の差に由来することを確認したうえで、それぞれの見方についてのネーゲルの説明を見ていく。

VZでは「道徳の見方」「不偏的見方」も私的生活 *private life* の見方に比べれば客観的だと言えるが、物理学の見方から言えば客観的とは言えない<sup>(26)</sup>と述べられている。この箇所から、VZの時期のネーゲルにとって不偏的見方は未だ客観性の程度が低い立場であって、それよりもさらに客観的な見方として物理学の見方という見方があると考えていたことが分かる。本節で見ていくように、この物理学の見方がニヒリズムの見方と一致することになる。

ネーゲルは物理学を「人間的見方からの最大の切り離し *detachment* を成し遂げた科学」と呼んでおり、物理学の見方は、Vにおける客観的見方と同じように「永遠の相のもの見方<sup>(27)</sup>」と呼ばれている。この意味



で物理学の見方とは、客観化のプロセスを極端にまで適用し、視点に由来する偏りを極力排除した「どこでもないところからの見方」に近い、もっとも客観的な見方だといえよう。この物理学の見方のもとで、私たちが何かを正当化し、重要だとみなす営みは、人間という特殊な生物が何かを価値づけているという事態、すなわち生物の活動や状態としての欲求や努力に還元されることになる。そしてこのような観点から見れば、私たちの営みはクモが生き延びるために努力しているのと何ら変わらない。<sup>(24)</sup> 物理学の見方から見れば、人間の努力もクモの努力も一生物がたまたま持っている偶然的なものにすぎない。

そしてここに至って、 $\langle N \rangle$ の物理学の見方は $\triangleright$ のニヒリズムの見方と一致すると言える。改めて確認すると $\triangleright$ のニヒリズムの見方とは、何かを正当化し重要だとみなす営みの最終的根拠は偶然的な私たちの慣習であり、それが重要であると信じる理由はないということを見出す見方のことだった。<sup>(30)</sup> つまり、 $\triangleright$ のニヒリズムの見方と $\langle N \rangle$ の物理学の見方のどちらも、私たちの価値づけの実践が偶然的な基盤しかもたないということから、それらが重要でないということを見出す見方なのである。<sup>(31)</sup> 実際、ネーゲルは物理学の見方が客観的ニヒリズムに陥らざるをえないと指摘している。<sup>(32)</sup> したがって、 $\langle N \rangle$ の物理学の見方は $\triangleright$ のニヒリズムの見方と一致するといえる。

この物理学／ニヒリズム的な見方が主観的見方と衝突することに気づくことが不条理の感覚を生じさせる、という論点も $\triangleright$ と $\langle N \rangle$ では共通している。例えばネーゲルは $\langle N \rangle$ で、客観的に見たときに自分の人生に重要性がないことと、主観的に見たときに自分が熱心に取り組まざるをえないことを並べてみることによって、不条理の感覚が生じると主張している。<sup>(33)</sup> このことから、 $\langle N \rangle$ の物理学の見方は $\triangleright$ のニヒリズムの見方と一致し、そしてこの見方が主観的見方の要求と衝突することが不条理の感覚を引き起こすといえる。したがって、

ここまでの議論はAとVNで共通している。

しかし、VNの議論はここでは終わらない。そこで、MNにおける客観的見方と二つの見方の衝突の内実について、Aとの間でどのような相違があるかを次節で確認する。

#### 四 MNにおける主観的見方と客観的見方の衝突②…不偏的見方としての客観的見方

第二節で論じたように、MNでネーゲルは客観的な見方の程度を認めているため、物理学の見方以外にも客観的な見方が存在している。そして、物理的でない客観的見方をとった場合には、私たちの人生が重要でないということは帰結しないと主張している<sup>(34)</sup>。

しかしそうだとするなら、Vで提示されたタイプの主観的見方と客観的見方の衝突は解消するよう思える。というのも、Vのニヒリズムの見方とは異なってMNの客観的見方において、人生は重要だからである。客観的見方を取っても人生が重要なものだとすれば、人生を重要なものとみなすよう要求する主観的見方との衝突は生じないはずだ。

ところがネーゲルは「これでは二つの見方を調和するためには足りない<sup>(35)</sup>」と述べており、このようなケースでも二つの見方の衝突は解消されないと主張している。このことが示すのは、MNにおける「主観的見方と客観的見方の衝突」にはVにおける衝突とは異なるものが含まれている、ということであろう。ではMNにおいて、ニヒリズムではない客観的見方と主観的見方との衝突とはどのようなものなのか。

この衝突について、ネーゲルは以下のように述べている。

私の人生は数えられないほど多くの人生のうちの一つであり、同様に唯一のものではない文明の中の一つである。そして、自分の人生に対して生来持っている傾倒 *devotion* は、もっともらしく私が人生に外から与えることのできる重要性とはまったく釣り合わない。外から見れば、私が自分の人生に与えられる重要性は、あらゆる可能な生活形式とその形式にそなわる諸価値を、等しい資格において含む全般的な見解において、私の人生が値するのと同じ重要性でしかない。<sup>(36)</sup>

この引用における外からの「客観的」見方がニヒリズムの見方ではないことは明らかだろう。客観的に見ても、自分の人生に重要性を与えることはできる。しかし、自分自身の人生を外から「客観的に」見るとき、それは他の人の人生とまったく同様に評価されることになる。この評価に基づけば、私が重要だとみなしていることと、赤の他人のそれとが、まったく同じ仕方での重要さが評価されることになる。私の人生は、これまで生まれてきた無数の人生と同じような重要さしかもたず、私の取り組んでいる事柄も、他の人が取り組んでいる無数の事柄と同じような重要性しかもたない、ということが明らかになる。<sup>(37)</sup>

そしてこのように、特定の人を特別扱いすることなく等しい仕方での評価する判断を、ネーゲルは「不偏的判断 *impartial judgement*」と呼び、功利主義のように自分と他人を区別しない道徳理論のうちにこのような判断を見ている。<sup>(38)</sup> そこで本稿では、全ての人や事柄を区別なく評価する客観的見方を、不偏的見方と呼ぼう。この不偏的見方のもとも自分の人生に重要性を与えることはできる。例えば、自分の人生は自分と同程度に社会に貢献している人と同じくらい的重要性はもつと言えるかもしれない。

しかしそれでも、引用にあるようにこの見方は「自分の人生に対して生来持っている傾倒」と衝突するの

である。だとすると、不偏の見方と衝突する自分の人生に対する傾倒とはどのようなものなのか。ネーゲルは引用した箇所の中でこの傾倒についての具体例をあげてはいない。しかしVN全体の議論から、この傾倒とは以下のものであるという推測が立つ。すなわち、他の誰でもないこの自分が生きていること、取り組んでいることを各人が重要だと思い、それに打ち込んでいる *devote* ことである。このことをVNの他の部分にもとづいて確認しよう。

長い間、私というものはいなかった。しかしあるときある場所である物理的有機体が形成され、突如として、この有機体が生きながらえている限り、私が存在する。主観的には（私にとっては！）驚異的な *stupidness* この出来事も、宇宙の客観的な流れにあっては、小さな波すら起こさない。<sup>(38)</sup>

ここでネーゲルが述べているように、自分が存在することは自分にとっては特に重要である。だからこそ、主観の見方においては他の誰でもなく自分が生きること、死ぬことが問題になるのだ。

ところが、引用で述べられているように不偏的な見方を取るかぎり、私が生き、死ぬことは、世界のどこかで誰か他の人が生き、死ぬことと全く同じ重要性しか持たない。同様に不偏の見方において、私が現に欲求し取り組んでいることは、それと同様に価値のある無限に多くのことと全く同じ重要性しか持たない。私にとってこの論文を書くことがどれほど特別に感じられるとしても、それは、私がすることが可能だった無限に多くの同様に価値があることと同じ重要性しか持たないのである。つまり「私が欲求するという事実を外から見ると、その事実は、内側から見たときに欲求することが持っていた重要性を決してもたない」<sup>(40)</sup>。

自分を不偏的に見る前には「世界像の中心に、自分の存在が大きく表れている」<sup>(1)</sup>。しかし、このような私の特別さは、自分を不偏的に見ることによって消えてしまう。ここに不偏の見方と主観的見方の衝突がある。さて、前節と本節の議論を要約しよう。MNにおいて主観的見方と衝突する客観的な見方には、ニヒリズムの見方と不偏的見方の二つのものがある。この二義性に応じて二つの見方の衝突にも二つの捉え方がある。一つは、あらゆるものが重要でないということを示す客観的見方と、何かが重要であることを要求する主観的見方の衝突である。もう一つは、自分と他人を区別することなく評価する不偏的見方と、自分が誕生し、何かに献身し、生きていることに特別な重要さを見出す主観的見方の衝突である。

## 五 不偏的見方と主観的見方の衝突が人生の意味の哲学においてもつ意義

ここまで四節にわたって、二つの見方の衝突についてのネーゲルの見解がどのように変化してきたのかを見てきた。しかしこのような見解の変化は、近年の人生の意味の哲学ではあまり取り上げられてこなかった<sup>(2)</sup>。ネーゲルの議論について取り扱ってきた研究の多くが客観的見方として取り上げるのはニヒリズム的見方である<sup>(3)</sup>。

このような状況にあって、不偏的見方と主観的見方の衝突という、これまで着目されていなかった衝突を取り上げることにはどんな意義があるのだろうか。その意義とは、これまで人生の意味の哲学ではあまり取り上げられてこなかった重要な、人生の意味の問いの一面をこの衝突が明らかにすることである。

これまで人生の意味の哲学では、「私の人生の意味は何か？」という問いを「私の人生にはどれくらい価値

値があるか？」という問いとして受け取り、取り組んできた。<sup>(4)</sup>これはまさに、自分の人生に対して不偏的見方を取って重要性をはかるということを意味している。

しかし、不偏的にみて私の人生がどれくらい価値を持つかということが明らかになっても、依然として人生の意味の問題は残るように感じられる。その具体例として「価値についての全知を持つ人」を考えよう。この人は自分がこれまでなしたこと全ての記憶を持ち、また、それがどれくらい価値を持つものであるかも分かっている。この人が「私の人生の意味は何か？」と問うとき、既存の問題設定の下ではこの人は自明な問いを問うていることになる。というのも、本人がどれくらい価値があるか分かっているのだから、この問いへの答えも簡単に分かると考えられるからだ。しかし、ここでの問いは自明な問いではないように思える。つまり、この人が問いたいのは、不偏的見方から見た自分の人生の価値を問う問いではないということだ。自分の人生にどれくらい価値があるかは分かっている。しかし、それでも問いは残っており、人生の意味の問題は解決しないのである。

ネーゲルの議論が教えてくれることは、人生の意味を問う際に、不偏的見方をもって自分の人生を評価するという方法を取ること自体が、自分の人生や自分が取り組んでいることがもつ特別さを扱えなくしてしまうということである。しかし私たちにとって、すなわち主観的には、自分自身が生き、死ぬことや、懸命に取り組んでいることがとりわけ特別であり、重要だというのは疑う余地がないように思える。それゆえ、これまで人生の意味の哲学が取ってきた方法では原理的に扱えない人生の意味の問題——赤の他人ではなく、この私が生きている意味は何か、他にありうるあらゆることではなく、まさにこのことに打ち込むことの意味は何か、という問い——が存在する。

これらの意味の問いを、不偏的ではない仕方でのように問うことができるのか、残念ながらこの点について本稿で検討することはできない<sup>(45)</sup>。しかしここまでの議論にもとづいて、ネーゲルが指摘した不偏的見方と主観的見方の衝突という主題をあえて取り上げることの意義は示すことができたといえよう。その意義とは、不偏的見方にもとづいて人生の意味を問うというその仕方によって、原理的に問えなくなってしまいう問いがあるということをも明らかに出したことである。

## 六 結論と課題

本稿では、ネーゲルの主観的見方と客観的見方の衝突についての見解がどのように変遷してきたかを検討してきた。この検討によって明らかになったのは、客観的見方の内実が変化することによって衝突についての見解も大きく変化してきたということである。そして人生の意味の哲学において、このような見解の変化が見落とされてきたことを指摘し、その重要性について論じた。不偏的見方のもとでは捉えきれないが重要な人生の意味の問いがある、という本稿の結論が正しいならば、この問いについてのさらなる分析が必要とされることになるだろう<sup>(46)</sup>。

註

- (1) Camus 1942.
- (2) Cf. Gordon 1984; Hiekel 2021; Holmes 2019; Luper-Foy 1992; Mintoff 2008; Pritchard 2010; Sohrabifar 2023, etc.
- (3) 邦題「人生の無意味な」。以下訳語の統一などのため翻訳は引用者によるが、既存の訳も大いに参考にした。
- (4) Cf. Hanson 2020; Landau 2023.
- (5) A おおじ、ネーゲルは「主観的 subjective」という単語を一度も用いておらず、「客観的 objective」という単語も「客観的 objectively」という副詞の形で一度用いているのみである (723)。本節で「主観的見方／客観的見方」と呼んでいるものは、それぞれ「私たちが自分の人生に対して持つ真剣さ／特定の生活様式の外からの見方」などと表現されている (718)。不条理の問題に関して「主観的見方／客観的見方」という表現が出てくるのは SO が初めてであるが、SO は A が所収されている論文集である MQ のために書き下ろされたものであり、ネーゲルは明らかに両者の議論を対応させることを意図していると考えられるため、本稿では A の議論について説明する際でも「主観的／客観的」という表現を用いている。
- (6) 718. この不条理の説明自体に対する批判もある (Feinberg 1980 261-264) が、本稿では扱わない。
- (7) Thomas 2009 6-7. ここでトマスは、視点を特徴としてもつ主観的見方に関して著作を通しておおよそ変化していないと指摘している。しかし実際のところ A の時点では、主観的見方が偏りをもつものであるという、次節で論じる点は明確にされていないかった。
- (8) A 719-720.
- (9) A 727.
- (10) A 720-727.
- (11) Cf. 註五。
- (12) Cf. 本稿第一節。
- (13) SO 206.
- (14) SO 197.
- (15) SO 197.



- (16) この説明は Dancy 2021 145-148 を参考にした。
- (17) SO 197; Wright 2005 364. じつでは認識の例を取り上げたが、Aの主観的見方において問題になっていた重要性の判断についても同様である。というのも、ネーゲル自身が「倫理的探求の方法は、何があるのかについての客観的概念の探求にいくらかの点で似ている」と述べ、「切り離された「客観的」見方にもとづいて、私たちの傾き inclination を矯正し、なにをなすべきかを見分けることが可能になる」(VN 140, 角括弧内引用者)と述べているからである。じつで「傾き inclination」と呼ばれているものは、私たちが自らの関心にもとづいて形成する、重要なことについての判断や欲求の偏りのことである (VN 168)。たとえば私はキリマンジャロに登ることを重要だと判断するかもしれない (VN 167-175)。しかしそのような判断や欲求の偏りは、「いかにあるべきか、いかに生きるべきか」を考える際には制約を受ける (VN 135)。例えば、生活に困窮した人が十分な食事を取りたいという欲求は、私のキリマンジャロに登りたいという欲求よりも優先されてしかるべきである (VN 167)。このように私たちは、何をすべきか、何が重要かを判断する場面においても、客観的見方に立って自らの偏りを矯正することを必要としている。
- (18) SO 206.
- (19) SO 206.
- (20) e.g. Nagel 1980 79-80.
- (21) SO 206.
- (22) SO 197.
- (23) SO 210.
- (24) SO 203.
- (25) VN 199; EP 10.
- (26) VN 5. 角括弧内筆者。私的生活の見方とは、行為者が自分もっている多様な欲求を考慮しつつ何をすべきかを決定する見方のことである。これをネーゲル (1970 16) は「自己利益的な見方 self-interested point of view」と呼んでいる。この見方を取るためには、その都度異なる欲求をもつ異時点の自分を対象化して、通時的に比較する見方を取ることができなくてはならない (1970 ch.8)。その意味で個人的生活の見方も客観的見方である。

- (27) VN 7.
- (28) VN 88.
- (29) VN 208-209.
- (30) Cf. 本稿第二節。
- (31) 偶然性に着目してネーゲルの不条理をについての見解を整理している研究として Seachris 2013 を参照されたい。
- (32) VN 146.
- (33) VN 218.
- (34) VN 147; 219.
- (35) VN 220.
- (36) VN 220.
- (37) ここで言っていることは、あくまで私と他者が同じ指標で評価されるべきだということであり、あらゆる人が等しく重要だと評価されるべきだということは含意しない。例えば、偉大な功績を残した人が平凡な人生を送った人よりも重要だという立場はこゝでの説明と両立する (cf. Jollimore 2023 ch.2.3)。
- (38) VN 199.
- (39) VN 55.
- (40) VN 168.
- (41) VN 212.
- (42) 人生の意味の哲学の外部で不偏的見方と主観的見方の衝突について論じている研究として、例えば Thomas 2005 を参照されたい。
- (43) Hanson 2020; Hiekel 2021; Anderson 2022; Landau 2023, etc.
- (44) このような見方として、例えば Metz 2013 ch.1. を参照されたい。
- (45) このような試みの一つとして、例えば Morfoka 2015 を参照されたい。
- (46) 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114 の支援を受けたものである。

## 引用文献

### A. ネーゲルの著作

- Nagel, T. (1970). *The Possibility of Altruism*. Clarendon Press.
- A : Nagel, T. (1971). The absurd. *Journal of Philosophy* 68 (20), 716-727.
- SO : Nagel, T. (1979a). Subjective and Objective. *Moral questions*. Cambridge university press, 196-213. (永井均訳 (1989) 「主観的と客観的」『ロマゼリ』3106-3111頁)。  
『勁草書房』
- MQ : Nagel, T. (1979b). *Moral questions*. Cambridge university press. (永井均訳 (1989) 『ロマゼリ』3106-3111頁)。  
『勁草書房』。
- Nagel, T. (1980). The Limits of Objectivity. *The Tanner Lectures on Human Values*, 1, 75-139.
- Nagel, T. (1987). *What does it all mean?: a very short introduction to philosophy*. Oxford University Press. (岡本裕一郎  
若松良樹訳 (1993) 『哲学のついでなついで……ついでに短く哲学入門』 昭和堂)。
- VN : : Nagel, T. (1989). *The View from Nowhere*. Oxford University Press. (中村昇ほか訳 (2009) 『ついでなついでなついでなついで』 春秋社)。
- EP : Nagel, T. (1991). *Equality and Partiality*. Oxford University Press.
- Nagel, T. (1995a). Personal Rights and Public Space. *Philosophy & Public Affairs*, 24(2), 83-107.
- Nagel, T. (1995b). Williams: One Thought Too Many. In *Other Minds*. Oxford University Press, 167-173.
- LW : Nagel, T. (1997). *The last word*. Oxford University Press. (大辻正晴訳 (2015) 『理性の権利』 春秋社)。
- Nagel, T. (2009). *Secular Philosophy and the Religious Temperament*. Oxford University Press.
- Nagel, T. (2023a). *Moral Feelings, Moral Reality, and Moral Progress*. Oxford University Press.
- Nagel, T. (2023b). *Analytic philosophy and human life*. Oxford University Press.

## B. ネーゲル以外の著作

- Anderson, M. B. (2022). Anti-theism, the underground man, and escaping absurdity. *Philosophical Forum*, 53(2), 115-131.
- Camus, A. (1942). *Le Mythe de Sisyphe*. Gallimard.
- Dancy, J. (2021). Contemplating One's Nagel. *Practical Thought*. Oxford University Press, 145-159.
- Feinberg, J. (1980). Absurd Self-Fulfillment. P. Van Inwagen (ed.), *Time and Cause: Essays presented to Richard Taylor*. Springer, 255-281.
- Gordon, J. (1984). Nagel or Camus on the Absurd? *Philosophy and Phenomenological Research*, 45(1), 15-28.
- Hanson, J. (2020). Perspectives on and Standards of Life's Meaningfulness: A Reply to Landau. *Ethical Theory and Moral Practice*, 23(3-4), 561-573.
- Hiekel, S. (2021). Meaning Nihilism - Is Our Life Absurd? *Zeitschrift Für Ethik Und Moralphilosophie*, 4(1), 3-21.
- Holmes, B. (2019). Is Human Life Absurd? *Philosophia (United States)*, 47(2), 429-434.
- Jollimore, T. (2023). Impartiality. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2023 Edition), Edward N. Zalta & Uri Nodelman (eds.), URL = <https://plato.stanford.edu/archives/win2023/entries/impartiality/>.
- Landau, I. (2023). Can Lives Be Seen as Meaningful Within the Cosmic Context? *Philosophia*, 51(4), 2085-2102.
- Luper-Foy, S. (1992). The Absurdity of Life. *Philosophy and Phenomenological Research*, 52(1), 85-101.
- Morioka, M. (2015). Is Meaning in Life comparable? From the Viewpoint of 'The Heart of Meaning in Life'. *Journal of Philosophy of Life*, Vol.5, No.3. 50-65.
- Mez, T. (2013). *Meaning in Life: An Analytic Study*. Oxford University Press.
- Mintoff, J. (2008). TRANSCENDING ABSURDITY. *Ratio*, 21(1), 64-84.
- Prichard, D. (2010). Absurdity, Angst, and the Meaning of Life. *Monist*, 93(1), 3-16.
- Seachrist, J. W. (2013). The Sub Specie Aeternitatis Perspective and Normative Evaluations of Life's Meaningfulness: A Closer Look. *Ethical Theory and Moral Practice*, 16(3), 605-620.
- Sohrabifar, V. (2023). A Critical Study of Thomas Nagel's View on Absurdity. *Journal of Philosophical Investigations*, 17(44),

372-389.

Thomas, A. (2005). Reasonable Partiality and the Agent's Point of View. *Ethical Theory and Moral Practice*, 25-43.

Thomas, A. (2009). *Thomas Nagel*. McGill-Queen's University Press.

Wright, J. R. (2005). Transcendence Without Reality. *Philosophy*, 80(3), 361-384.

(杉野 ちとし・東北大学)

